

今月のメッセージ（2018年5月）

日曜日に集まるということ



カトリック静清地区司祭 和野信彦神父

わたしたち静清地区の教会には5つの小教区(巡回は1つ)があります。ここに4人の司祭(主任司祭2人、助任司祭1人、協力司祭1人)が常駐しています。なかでも、八幡教会に居住してくださっている岡村神父さまは金祝を迎えられなおお元気にミサ、葬儀、結婚式など精力的に協力をしてくださっています。本当にありがたいことです。

しかし、このような恵まれた現状は今後も約束されたものではありません。司祭数の減少と高齢化はこれからも進んで行くと思われまます。また、司祭の急病や事故のときなどはもう対応が出来なくなります。こうした時、「ミサがないから教会には行かない」とするのならば教会の伝統である「主の日」の重要性を認めないことになってしまいます。

第二バチカン公会議は、日曜日について「教会は、キリストの復活の当日に遡る使徒伝承により、復活祭儀を八日目ごとに祝う。主の日と呼ばれるその日、キリスト信者は、一つに集まらなければならない。・・・主の日は根元の祝日であり、喜びの日、休息の日でもある。」と語ります。つまり、①日曜日は復活体験と深く結ばれた日であるということ、

②教会は、日曜日と一緒に集まり神のことばを聞き、祭儀に参加して神に感謝を捧げるといことです。

聖書は、弟子たちが週の初めの日に復活したキリストと出会う体験を示しています。教父たちも「キリストこそ正義の太陽」であるとし、教会が集まる日を日曜日と呼びました。やがてキリスト教は、ローマ帝国に公認され、日曜日が義務づけられて以来、長い間キリスト信者は「日曜日に教会に行く」ことを当たり前のこととして行ってきました。

この伝統は、確かにミサに参加することを目的としていますが、理由により司祭不在の場合は「司祭不在の主日の集会祭儀」をもって「日曜日に集まる神の民」の姿を実現することが可能になります。つまり、共同体の仲間が主の日である日曜日に集まり、みことばを聞き、ともに祈り、任命を受けた臨時の聖体奉仕者の手からキリストのからだをいただくことをもって、共同体の絆をより意識します。そして、神の民としての存在をともに分かち合うのです。

4月29日をはじめに第5日曜日には静清地区教会持ち回りでこの「司祭不在の主日の集会祭儀」を行うことにいたしました。それは、きたる司祭不足の状況があっても対応出来るように。そして、日曜日に集まる神の民の意味を分かち合うためです。この日は司祭の説教ではなく、信徒における教話として信仰体験を聞いたり、みことばの分かち合いなどをもって互いを受け入れあう共同体の日としてくださいますように。そして、その日にミサのある小教区では、集会祭儀を行っている教会のために祈ることをもって静清地区の絆を意識してまいりましょう。

